

全国障害者問題研究会の研究誌

障害者問題研究

第49巻 第2号

特集

障害福祉現場で働く
職員の育ちと集団化

Vol.49

No.2

障害者問題研究 49巻2号を読む会

■話題提供 深谷弘和さん（天理大学）

新自由主義における福祉労働者の「個別化」と集団性の意義

■特集執筆者の発言

■参加者の意見交流

日時 10月1日(金)18時～20時

■zoom ミーティングによる開催

お申し込み

（参加者はお手元に当該号をご用意ください。申し込みフォームからも注文できます。）



問い合わせ 全障研事務局 info@nginet.or.jp

<https://forms.gle/EU84b5U>

特集にあたって

白石正久(龍谷大学名誉教授、本誌編集委員)

大学の社会福祉専門職養成課程で働く教員は、卒業生が福祉職を選択すること、そしてその職場で長く働きつづけることの難しさを、例外なく実感していることだろう。そこにある障壁は何か。さらに、社会福祉とは無縁な労働にあった人々が、壮年期になって福祉現場に入ることも少なくない。彼らは何を求めて転職し、福祉実践に何を見出しているのだろうか。

その関心から、障害福祉の職員の「育ち」をテーマとする本号は編集された。大人である職員の「育ち」を用語とすることに抵抗がないわけではない。しかし糸賀一雄は、「この子らを世の光に」と言ったとき、「世の光」は子どもだけが発するのではなく職員もまた「世の光」であることを含意し、子どもとの「共感の世界」のなかで職員が発達する姿を歓喜と期待をもって記述していた。「育ち」とは、職員の人間的発達のこととしたい。

しかし糸賀の時代から 50 年余、本誌の深谷論文が示す通り、福祉労働者は新自由主義下の市場原理、競争原理に対して、それを内面化し、分断されて、同僚とともに実践を創る集団化がますます困難になっている。さらに非正規労働者の増加、賃金・労働条件や社会的承認の不十分さは、「がんばっているのに、どんどんしんどくなる」という実感と将来への不安を強いる。それは、職場の人間関係の「しんどさ」に転化し取れんしていく。長い時間のなかで信頼しあえるようになった職員が、ある日とつぜんのように職場を去っていく現実、障害のある人や家族を悲しませる。そのことは本誌の報告でリアルに語られている。

峰島論文は、それに抗するように職員の自己形成を援助してきた、自身も参加する実践の報告である。理念、そこから発する既成の支援方法などと、一人ひとりの職員の思いや志向は整合するとは限らない。個人間の相異も当然のことである。違いを認めあえる関係性を大切に、個人の試行錯誤と気づき、その共有から自己形成を進めていくことの大切さが提案されている。理念の確かさこそが職員の意識と技能に反映し、それを形づくる基盤である

と考えがちだが、職員は自らの労働、同僚関係、そこでの矛盾と葛藤、他者と自己への認識の変化の積み重ねのなかで、理念も技能も長い時間をかけて主体的につかみ取っていく。

市場原理による社会福祉と社会福祉労働の商品化によって労働者は歴史的に拡大したが、賃金・労働条件は抑制され、労働の意味と価値から遠ざけられていく。そのとき職員は、階級関係を引き写した社会福祉政策と労働者の矛盾を、自らの「しんどさ」の背景として必ずしも認識していない。その限られた視野のために、労働者の発達契機であるべき失敗や試行錯誤、その支えと共同の関係であるべき同僚が、「しんどさ」という反対物に転化していく。こういった社会の「しくみ」について学びあえる機会が必要ではないか。

仲間とつながりながら自由な意思によって学んでいく学習機会の保障、社会福祉労働のための社会変革の基礎理論の構築、労働組合運動の意義の共有などのために、発達の権利の保障を目的とする全障研のような研究運動が担うべき役割は、さらに自覚されてよいであろう。

特集にあたって 白石正久 1

育てあい育ちあう職員の育ち試論●峰島 厚 2

新自由主義における福祉労働者の「個別化」と集団性の意義●深谷弘和 10

■報告■

よりよい障害福祉をめざす職員の研修、育成の取り組み●向 幸子 18

ささやかに見えようとも、「人間的価値の大きな事実」を確かめ合う●村岡真治 24

東近江圏域合同職員研修の取り組み●松村優子 30

【家族として障害福祉現場の職員に望むこと・期待すること】

傍らに寄り添い続けてほしい●内藤佳子 36

本人を真ん中に共に歩む仲間でありたい●小川真奈美 39

連載／実践に学ぶ

特別支援学校小学部の教育実践の報告 山下紋奈 42

【山下実践に学ぶ】越野和之 48

児童の相談支援の実践の報告 林田 碧 50

【林田実践に学ぶ】高橋真保子 56

連載／ワイドアングル

ヤングケアラーとその家族——日本の現状と1990年イギリスで起きた議論 澁谷智子 58

資料 脳性まひを有する若者たちの当事者研究 小森淳子 64

特別報告 兵庫優生保護法被害国賠訴訟証人尋問 補充陳述書 藤井克徳 72



●読む会へのおさそい 佛教大学・編集委員 田中智子

現在、多くの福祉現場で、世代交代や次世代育成が課題となっていることと思います。戦後の障害福祉を切り拓いてこられた先人たちの実践は、対象者の姿や支援の中から法則性や理論を発見し、社会の価値観を揺さぶり、後追的に制度がつくられていきました。近江学園開設時に、糸賀一雄が「一.四六時中勤務 二.耐乏の生活 三.不断の研究」を職員の働く条件として打ち立てました。現代において、それらを踏襲することは到底できませんが、おそらく糸賀たち当時の職員は、労働者としては過酷といえるそれらの環境に身を置くことを主体的に選択していたのだろうし、それだけの魅力や価値を実践に見出し、自分の生活や人生すらも重ね合わせていたことにある種の憧れを抱きます。

翻って現在、契約制度は、対象者の暮らしだけでなく職員の働き方も大きく変えました。非正規化、非常勤化、個別化の流れは、職員集団の形成を困難にし、実践の魅力を覆い隠し、後継者を育てることを難しくしています。

今、福祉労働者として「育つ」ことの中核に何を据えるべきなのか、どのように「育つ」ことを支えればよいのかということ、各地で奮闘されている事例に学びながら、皆で一緒に考える機会となればと思っています。これらの問いに即時的な答えはありませんが、考えることを止めないことが大事なのだと思います。ぜひ多くの方の「障害者問題研究 49 巻 2 号を読む会」へのご参加をお待ちしております。



お求めは

全障研出版部

新宿区西早稲田 2-15-10 西早稲田関口ビル 4 階

電話 (03) 5285-2601・FAX (03) 5285-2603・nginet.or.jp

